

日本英文学会関東支部
第 19 回（2020 年度秋季大会）
プログラム

日時：2020 年 11 月 8 日（日）

オンライン（Zoom ウェビナー）同時配信方式にて実施

※大会参加には、事前の申し込みが必要です。申し込みは、10 月 25 日から可能です。詳しくは関東支部 HP をご覧ください。

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax: 03-5261-1922

E-mail: kanto@elsj.org

11:30	Zoom へのエントリー開始	
研究発表 1 12:00 12:40	第1室	第2室
	虚偽から真実へと至る、 <i>Cymbeline</i> の“report” (発表者) 富田 岳 (司会) 本多 まりえ	オーストラリア『ブレテン』誌にみる政治的位相——文学的ミドルパワーの形成をめぐって (発表者) 加藤 彩雪 (司会) 木下 誠
研究発表 2 13:00 13:40	第1室	第2室
	『間違いの喜劇』におけるレヴァント貿易とイングランド人の自己成型 (発表者) 三原 里美 (司会) 本多 まりえ	バラバラの身体——アンジェラ・カーター『魔法の玩具店』とロンドン大空襲 (発表者) 奥畑 豊 (司会) 生駒 夏美
分野別 シンポジウム 1 14:00 16:00	シンポジウム 1 (イギリス文学) 第1室	シンポジウム 2 (アメリカ文学) 第2室
	『妖精の女王』と『失樂園』——叙事詩をどう楽しむか? (司会) 岩永 弘人 (講師) 水野 眞理 (講師) 笹川 渉 (講師) 松村 祐香里	現代フェミニズム奇譚——テキストを編む女性の身体のいま・ここ (司会) 佐藤 里野 (講師) 小澤 英実 (講師) 日野原 慶 (講師) 阿南 順子
分野別 シンポジウム 2 16:20 18:20	シンポジウム 3 (英語学・英語教育) 第1室	
	考えを深める英語教育実践——Content では何を教え、どう評価するのか (司会・講師) 今井 純子 (講師) 鈴木 栄 (講師) 白井 龍馬 (講師) 柳川 浩三	

エントリー開始 (11:30)

12:00-12:40

【研究発表1】第1室

(発表者) 立教大学大学院博士課程後期課程 富田 岳

(司会) 明治学院大学准教授 本多 まりえ

虚偽から真実へと至る、*Cymbeline* の“report”

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) の晩年のロマンス劇『シンベリン』 (*Cymbeline*, 1609-10) における、誹謗されるヒロインというテーマを考察する上で重要なのは、劇全体にわたって現れる“report” (報告、評判) という言葉だ。初期近代における“report”は虚偽と結びつくもので、その通念はこの芝居にもある程度反映されているのだが、『シンベリン』では最後に“report”が逆転して真実に到達する。だがヴァレリー・ウェインをはじめとする近年の批評家は、作品全体に及ぶ広がりを持つはずの“report”の問題にはあまり注目していない。そこで本発表では、『シンベリン』の“report”という観点から、イノーゲンに関する中傷のプロットを考察し、宮廷人の虚偽性と対照的なベラリアスとピザーニオの役割や、ローマとブリテンの戦争のプロットにも注目しながら、通常は間違いと結びついてばかりいる報告や評判が、この芝居ではいかに真実に至るのかを明らかにしたい。

【研究発表1】第2室

(発表者) 日本女子大学助教 加藤 彩雪

(司会) 成城大学教授 木下 誠

オーストラリア『ブレテン』誌にみる政治的位相
——文学的ミドルパワーの形成をめぐって

オーストラリアの研究者の多くは、現在のオーストラリアで読まれている書物の多くがイギリスやアメリカの出版社から販売され、オーストラリア独自の読み物よりむしろ海外の出版物の方が市場に出回っていることを指摘する。しかしながら同時に、オーストラリア人作家によって書かれた書物もまた海外で読まれており、パトリック・ホワイトのノーベル文学賞受賞やリチャード・フラナガンのブッカー賞受賞に見られるように、オーストラリアのテキストは穏やかながらも確かな影響力を国外に対して誇示していることもまた事実である。本発表では、オーストラリアの出版物をめぐるこのような現状が、政治的なミドルパワーの言説を映し出していると捉え、その一例として、オーストラリアで出版され広く読まれた週刊誌『ブレテン』に注目する。D. H. ロレンスやジョセフ・コンラッドをはじめとする国外の作家と『ブレテン』誌との交流を探ることで、辺境的なわけでもない、かといってイギリス文学の系譜に完全に取り込まれることもないオーストラリア文学の今日の姿が、『ブレテン』誌に多くを負っていることを明らかにしたい。

13:00-13:40

【研究発表2】第1室

(発表者) 大東文化大学非常勤講師 三原 里美

(司会) 明治学院大学准教授 本多 まりえ

『間違いの喜劇』におけるレヴァント貿易とイングランド人の自己成型

シェイクスピアの『間違いの喜劇』は同時代ロンドンの商業世界と重ね合わされる傾向にある一方で、当時のレヴァント貿易を軸に解釈されることは少ない。だが、レヴァント貿易商品への言及が繰り返されるこの劇において、主筋である双子の取り違えが原因で多くの取り引きが失敗に終わる点は注目値する。本発表では、初期近代におけるレヴァント貿易を通じた輸入品がイングランド人の自己像の形成に与えた影響を手掛かりに、イングランドに流入する地中海文化に対する不安を描いた物語として、双子の取り違えの物語を再考したい。劇における誤った交換が家庭と地中海の経済圏との間を行き来する商品の流動性を示唆していることを指摘したのち、トルコ文化の流入に警鐘を鳴らす同時代の劇作家たちが憂慮したような、“stranger”へと変容するイングランド人を、劇中で地元住人の家に侵入する旅人がいかに表象しているかを論じる。

【研究発表2】第2室

(発表者) 日本女子大学専任講師 奥畑 豊

(司会) 国際基督教大学教授 生駒 夏美

バラバラの身体——アンジェラ・カーター『魔法の玩具店』とロンドン大空襲

アンジェラ・カーターの第二長編『魔法の玩具店』(*The Magic Toyshop*, 1967)は作者自身の言葉によれば一種のお伽話である。本発表ではテキスト内外の手がかりを参照しつつ、南ロンドンを舞台にしたこの小説を、第二次世界大戦中の大空襲(the Blitz)や疎開との関わりから分析し、本作を二十世紀における暴力的な死——とりわけその一つの形態でもある戦時下における大量の死——を暗示的に扱った「現代のお伽話」として再読する。ここでは空襲の被害やヨークシャーへの疎開に関するカーター自身の体験のみならず、作中に描かれる南ロンドンの地理的・歴史的情報や、作者が意識したと思われるフロイトの著作などをも踏まえながら、『魔法の玩具店』において繰り返し登場する「バラバラの死体」のグロテスクなモチーフを第二次大戦(及びその記憶)という文脈に置いて検討する。そしてその上で、幾度も反復的に回帰するこの暴力的な死のイメージを抑圧・隠蔽されたトラウマとして考察してみたい。

14:00-16:00 第1室

【部門別シンポジウム1（イギリス文学）】

『妖精の女王』と『失樂園』——叙事詩をどう楽しむか？

(司会) 東京農業大学教授 岩永 弘人
(講師) 京都大学名誉教授 水野 眞理
(講師) 青山学院大学准教授 笹川 渉
(講師) 金沢学院大学講師 松村祐香里

英文学の1つの伝統的文学ジャンルである叙事詩の読み直しを図る。主に扱う作品は、『妖精の女王』(*FQ*)と『失樂園』(*PL*)。これら2つの作品は、ジャンルとしては同じ叙事詩に属するが、非常に対照的な作品と言ってよい(詩形、内容、歌い方、など)。本シンポでは *PL* を意識して *FQ* を読み、また *FQ* を意識して *PL* を読む事で、それぞれの作品の特質をあぶり出す事を主たる目的とする。想定される聴衆はミルトンやスペンサーの専門家も含むが、むしろ日頃あまりこの時代の叙事詩(あるいは詩自体)に触れる事が少ないフロアーを想定しているので、まずはじめに両作品に関する基礎的な事実の確認を行う予定(岩永担当)。また、これらの大詩人の詩を昨今の英文学専門の学生にどのように面白く、かつ効率的に教えていくかのヒントも、いくつか提示できればと考えている。

『妖精の女王』と『樂園喪失』における冶金

水野 眞理

16世紀中期のヨーロッパでは、それまで職人の手に任され、一般人には秘められていた金属加工技術に関して、シエナのピリングッチオ、ケムニッツのアグリコラ、フィレンツェのチェッリーニといった著者による専門書が出版された。これは一方では戦争に必要な金属類を効率的に調達する技術、他方では芸術の素材としての金属類の扱いの知識が求められたことの現われであろう。しかしながら、ルネサンスのヨーロッパでよく知られていたヘーシオドスの『仕事と日』およびオウィディウスの『変身譚』などは、文明を黄金時代からしだいに墮落して鉄の時代へと至る流れとしてとらえており、そのトポスはルネサンスの叙事詩を強く支配してもいた。

本シンポジウムでは、エドマンド・スペンサーとジョン・ミルトンがそれぞれの叙事詩の中で金製品の生産を扱う詩行をとりあげ、それらがどのように時代を反映しているのか、またどう古典的トポスの折り合いをつけているのか、といった点を考えたい。

『妖精の女王』と『失樂園』における宴

笹川 渉

叙事詩というジャンルが、英雄物語による国家や国王の賛美という枠組みを前提とするならば、スペンサーの『妖精の女王』はその枠に収まるものの、ミルトンの『失樂園』は例外である。なぜならスペンサーの叙事詩は、妖精の女王の宮廷で開催される祝宴を物語の枠とし、イングランドとエリザベス女王を讃えることを目的としているのに対し、共和政府を支え、スチュアート朝の支配を否定したミルトンの描く『失樂園』は、国家の繁栄よりもアダムとイヴが築く家庭の賛美とその2人の救済に焦点が当てられているからである。

スペンサーとは異なり、宴 (feast) を描くことは「英雄 (叙事詩) の名にふさわしくない」(9.40-41) と宣言するミルトンだが、一方で『失樂園』にはキリスト教的な宴を描き出していることは見逃せない。本発表では、叙事詩の要素として欠かせないものの一つである宴に注目して両作品を読み直すことで、キリスト教的叙事詩としての位置付けを考察したい。

叙事詩に楽しみを求めるのは間違っているだろうか

松村 祐香里

今日、学生に叙事詩の面白さを伝えるのは難しい。彼らにとって詩は、奇妙なルールに縛られた分かりづらい文章の連なりのようなものである。一方で、叙事詩に頻繁に用いられる神話的モチーフや登場人物、あるいは英雄の冒険物語に親しみを覚える学生はことのほか多い。そのような学生の詩に対する抵抗感を減らし、興味をもたせるにはどうすべきか。

本発表では、*The Faerie Queene* の第1巻と *Paradise Lost* を、それぞれ赤十字の騎士とセイタンの一種の「冒険譚」とみなして比較することを考えている。両者とも選ばれし者として試練を課されるものの、最終的に前者がドラゴンを倒すのに対し、後者は自身が蛇に変えられてしまう。このような真逆の結末をもたらす原因は、主人公が試練を受けたあと、悔悛を経て天の恩寵を受けるか否か、にあるだろう。この点に着目しながら2つの作品を読み比べ、まずはストーリーを追うことで、学生も長編叙事詩を無理なく楽しめるのではないかという可能性を示したい。

14:00-16:00 第2室

【部門別シンポジウム2（アメリカ文学）】

現代フェミニズム奇譚——テキストを編む女性の身体のいま・ここ

（司会） 東洋大学講師 佐藤 里野

（講師） 東京学芸大学准教授 小澤 英実

（講師） 大東文化大学講師 日野原 慶

（講師） 関西大学教授 阿南 順子

2019年3月、アメリカのフェミニスト・アートの先駆者として知られるパフォーマンス・アーティストの Carolee Schneemann が79歳でこの世を去った。彼女は1975年の *Interior Scroll* において全裸で登場し、自身の女性器から紙の巻物を取り出して読み上げるパフォーマンスを通して「テキストを産む女性の身体」を強烈なヴィジュアルとともに提示した。それから40数年、フェミニズムは変遷を経て、女性の身体が本質的な概念として無批判に参照されることには留保が置かれるようになった。しかし、フェミニズムを取り巻く昨今の文化的状況を背景に、女性の経験は現代小説やアートの分野で次々と新奇なテキストを編み続け、その結果、身体をめぐる物語が語られ、翻訳され、上演される空間は拡大しているように見える。本シンポジウムでは、主に日・米の小説やアートの領域でそのようなテキストに取り組んでいる3人の研究者を招き、それぞれの視点から、いま女性の身体の表象についてどのような議論が可能なのかを検討する。

逸脱する<女>の身体——Monstrous Feminine 再考

小澤 英実

Ellen Moers や Barbara Johnson が Frankenstein の物語に出産の不安を読み解いて以来、フェミニズム批評は、グロテスクな怪物表象にはそれを産み出す怪物的な女性性の表象が内包されていることを繰り返し指摘してきた。ある身体を「女性」にカテゴライズする最大の根拠となる生殖行為において、出産という出来事は、母と子がともに互いを *object* し、ともに互いの *subjectivity* に決定的な亀裂を入れる起源となる。本発表では、Carmen Maria Machado の *Her Bodies and Other Parties* (2017) や John Waters の *Pink Flamingos* (1972)、*Female Trouble* (1974) などに描かれた、規範から逸脱する“*abnormal*”な母子関係に焦点を当て、アブジェクションとしての女性身体や *Monstrous Feminine* としての母性の考察を通し、女性の身体およびセクシュアリティの再配置がいかにかを可能かを検討する。

ある基準をこえて「大きい」とみなされる身体を、現代作家が作品の中心に置くとき、共通する傾向は、そのような身体を産み出す恣意的な基準自体への批判と、それからの解放の探究である。アメリカにゆかりのある近年の例として Sarai Walker による長編小説 *Dietland* (2015)、Mona Awad による連作短編集 *13 Ways of Looking at a Fat Girl* (2016)、Roxane Gay による回想録 *Hunger: A Memoir of (My) Body* (2017) などを取りあげ、これらの作品のコンテクストとして、特定の身体を規範外に置き病理化する“obesity”の言説と、それに抗う“fat liberation”の言説との間の、相容れない身体観の対立があることを確認する。その上で、後者の言説に共感を示す文学テキストが、社会運動としての“fat liberation”に併走する点と、そこから逸脱する点を明らかにする。2012 年創刊のジャーナル *Fat Studies: An Interdisciplinary Journal of Body Weight and Society* を中心に、これまでのファット・スタディーズにおける議論を参照する。

新自由主義と女性身体——3次元から2次元へ

フェミニズムの視点から新自由主義を論じた研究は、女性の労働搾取の問題を、特定の産業における実態調査を通じて論じたもの、映像作品やパフォーマンス作品における女性の表象分析を通して考察したものなどがあり、国内外で様々な議論が展開されている。本発表では、女性の労働搾取をアート作品における身体表象の「次元性」に注目して論じたい。やなぎみわの『エレベーターガール』（1996-1998）を中心に考察する。本作は百貨店のエレベーターガールを演じる女性たちを撮影した一連のデジタル写真作品であるが、当初はギャラリーなどを百貨店に見立てたパフォーマンス作品だった。演者の女性たちを写真空間に移動させることにより、やなぎは彼女たちの3次元身体を2次元化し、物質性を消し去る。これを本発表では、エレベーターガールに代表される非正規雇用の女性たちの、過酷な物質的現実に対する拒絶願望を象徴するものとして論じる。

16:20-18:20 第1室

【部門別シンポジウム3（英語学・英語教育）】

考えを深める英語教育実践——Content では何を教え、どう評価するのか

（司会・講師） 順天堂大学准教授 今井 純子

（講師） 東京女子大学教授 鈴木 栄

（講師） 横浜女学院中学校高等学校英語科主任 白井 龍馬

（講師） 法政大学准教授 柳川 浩三

言語学習の訓練を目標とするのではなく、学習内容に重点を置いた内容言語統合型授業（CLIL）が注目されているが、考えを深めることができる内容（content）では何を教え、評価をどうすべきであるのかについては様々な事例の共有が求められる。本シンポジウムでは、考えを深める英語の授業例を、高校と大学から紹介し、content に相応しい内容とその検証について議論を深めたい。試験や資格のための学習は短期的なモチベーション向上には作用するが、深い学びに学習者を導く、内面からわき上がるモチベーションには繋がらない。深い学びに繋がる content は何か、教える方法にはどのようなアプローチがあるか、年齢の異なる学習者では方法と内容は異なるのか、について議論していく。高校・大学における様々な取り組みの事例紹介を通して、文脈に応じたテキスト選択をどのようにするか、テキストを使いどのように考えを深めることができるのかについて等、授業構築の参考や意見交換の場を提供したい。

汎用能力と言語運用能力を同時に育成する CLIL とその評価について

白井 龍馬

社会のグローバル化に伴い、汎用能力と言語運用能力を同時に伸ばす授業の需要は中高の教育現場で高まるばかりだ。CLIL（内容言語統合型学習）はその全ての要求に応えうるものと考え、本校では3年前にこの指導法を導入した。海外在住経験のある生徒がほとんどいない本校においてCLILを導入することは難易度の高い挑戦であったが、カリキュラムマネジメントに工夫を凝らすことによってその課題を解決してきた。総合学習を英語で学ぶ soft CLIL では、ESD（持続可能な開発のための教育）を日本語・英語双方で深めることにより高次の教育目標実現に挑戦している。また生物や聖書を英語で学ぶ hard CLIL も実践しており、他教科の内容を英語で学ぶことの効果や重要性を生徒と教員が双方よく実感している。多岐にわたる授業実践の内容を報告するとともに、その評価方法についてパフォーマンス評価とその他の評価にわけて言及する。

文体論の知見を入れた児童文学講読の試行的授業

鈴木 栄

実用的な英語力の育成に重きが置かれている現在の英語教育では、教材の中に含まれる文学的な読み物が激減してきているが、学習者のために編集された英語教材ではなく authentic な読み物である英語の文学小説を EFL (English as a Foreign Language) 環境における授業で使う意義はある。学生への文学作品に関するアンケートの結果を踏まえて、読みやすく教育的示唆を含むニュージーランドの作家 Margaret Mahy の短編 *Chocolate Porridge* を題材として選び、授業を組み立てた。内容理解のために文体論の知識を紹介した。文体論という眼鏡を通して作品を読むことで学生の内容理解がどのように深まったか、言語や文化に関する発見があったか、英語で小説を読むことに関して考えが変わったか、について報告する。また、今回の試行を経て、授業の中で文学作品を英語で読む場合の、テキスト選択、指導方法、学習目標、評価方法と課題について論じる。

グローバルイシューについて考える内容言語統合型授業 (CLIL)

柳川 浩三

本発表の目的は、大学生を対象とした CLIL の英語授業を通じて、三つの CLIL の構成概念——Culture (文化・協同)、Cognition (認知・思考)、Communication (言語・コミュニケーション)——について学生の内部でどのように変化があったかをお伝えし、英語で内容を教える授業づくりに向けて示唆を共有することである。その 3 つとは、①他者と考え方や経験を共有し、多文化的・グローバルな視点をもてたか——Culture、②高次の認知能力 (批判的に考える力や想像力) と低次の認知能力 (説明力や応用力) にどの程度変化があったか——Cognition、③実際の授業で使われたタスク (活動) を有意義で楽しいものと感じ、本授業が英語力の向上に役立ったと思えたか——Communication である。そして、これらの解からこの授業全体を吟味したい。授業は 2018 年度 4 月～7 月下旬の半期週 2 回、計 28 回、大学生 28 名 (2 年生 22 名、3 年生以上 6 名) を対象に行われた。Content (授業内容) は、差別や格差、貧困、移民問題等の地球規模的諸課題——グローバルイシュー——とした。教科書はオリジナル教材及び適宜、BBC 等の放送内容を利用した。授業の最終回に、アンケートを配布し無記名で回答を依頼し、その場で回収した。本発表は、そのアンケート結果に基づいている。

「自分ごと」としての英語学習——実践から理論、そしてカリキュラム開発へ

今井 純子

英語教育では、英語をグローバル語として捉える動きが定着しつつあるが、異文化や地球規模の課題を「自分ごと」として捉えさせるには、何をどのように教えたら良いのだろうか? 本発表では、大学 1、2 年の必修英語における内容言語統合型学習 (CLIL) の一例を挙げ、過去 4 年間の実践を振り返る。具体的には、(1) 異文化コミュニケーションをテーマとする 1 年次授業において、エッセイ・ライティングに取り組む過程で行ったグループワークにて学生が内容と言語についておこなったディスカッション、(2) 気候変動・貧困等の地球規模の課題を扱う 2 年次授業で、持続可能な開発目標 (SDGs) を軸

に授業を展開してみた後の成果物、を事例として紹介する。また、継続実施した学期末アンケートを元に、学生が学習体験をどのように捉えたか言及する。これら実践を踏まえた上で、理論に立ち戻り、今後の課題についてカリキュラム開発の視点から提言する。